

# 漢代における遼東郡と交易

## Liaodong commandery and trade in Han dynasty period

中村 大介\*

NAKAMURA Daisuke

漢代の遼東郡は楽浪郡とならんで、朝鮮半島や日本列島の社会に関連の深い地域である。さらに、王莽期頃から烏桓が塞内でも活動していたことが、発掘によってわかってきた。そこで、本稿では遼東半島の墓を軸に時期的変遷と交流関係について考察を行い、当時の交易活動について検討した。その結果、東の膠東半島と北の騎馬遊牧民との仲介者として貝墓を造営していた人々の活動が重要であることが理解された。

キーワード：遼東郡、貝墓、ガラス小玉、烏桓

### はじめに

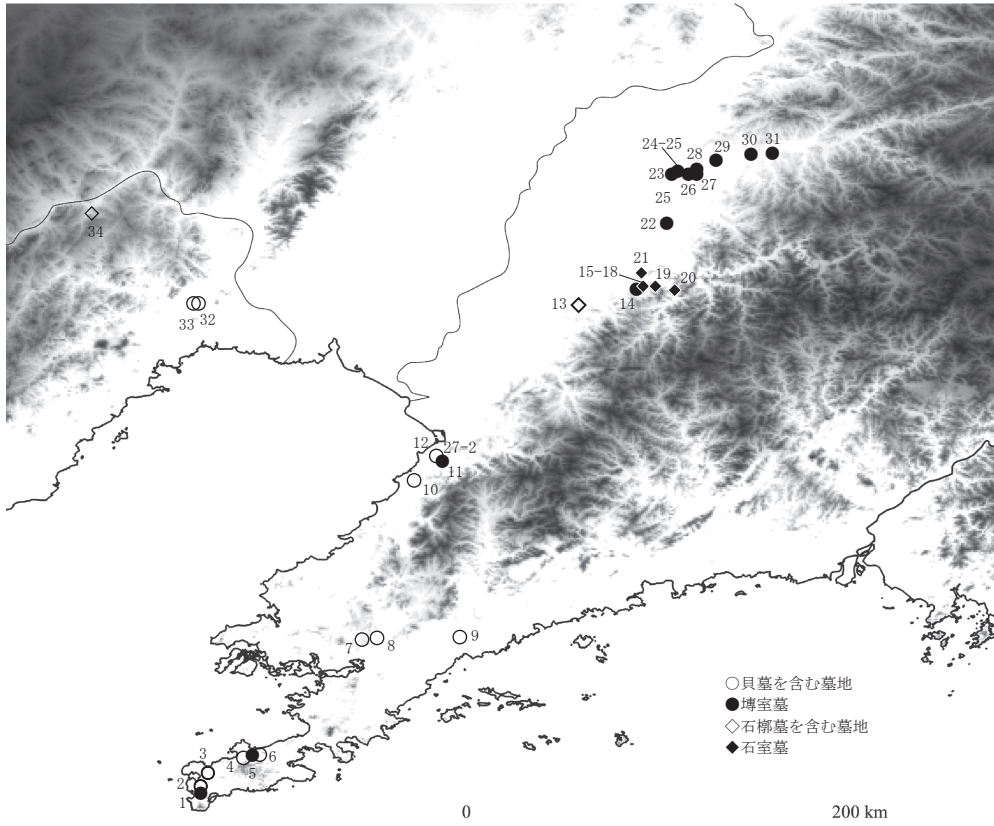
遼東郡は燕の秦開遠征後に設置された五郡のうちの一つであり、漢代以降は南の楽浪郡とともに東方への結節点となっていた。郡治である襄平は現在の遼陽に置かれたと考えられており、後漢以降、しばしば壁画を伴う石室墓がみられる。これに対し、遼東半島南部は後漢初期まで土着的な貝墓<sup>1</sup>が分布する地域である（図1）。近年では、遼陽地区の南端で騎馬遊牧民の烏桓の墓とされる石槨墓も発掘され（徐・白 2015）、従来考えられてきた様相より複雑な様相を呈することがわかってきた。

興味深いことに、烏桓墓とされる墓には、中原系の漢墓からは数点ずつしか出土しない紺色や淡青色のガラス小玉が多数出土している。これらは、同時期では楽浪郡、三韓、倭で多くみられるものである。そこで本稿では、前漢晩期から後漢初頭の編年を整理しつつ、ガラス小玉が広がる背景や遼東郡での交易活動について若干の考察を試みたい。

なお、今回対象となる地域においては、秦・前漢初期以後は、前漢早期が文帝～武帝早期（前180～118年）、前漢中期が武帝の五銖銭鑄造開始～宣帝期（前118～49年）、前漢晩期は元帝～王莽前（前48～後8年）という年代観で記述されることが多い。また、王莽期（8～23年）は光武帝が五銖銭を再度鑄造するまでと合わせて王莽・後漢初期（8～40）としてまとめられ、後

\* なかむら・だいすけ、准教授・埼玉大学教養学部、哲学歴史専修・考古学

<sup>1</sup> 貝墓は膠東半島から遼東半島、渤海湾北岸の錦州まで広がる土着的な墓制であるが（白1998）、墓壇に貝を充填するという共通性はあるものの、内容は多岐にわたる。内部にも木槨を有するものや、円礫や瓦片を併用するものもみられる。また、貝墓にならんで円礫のみのものや、土や石を充填するだけのものもある（遼寧省文物考古研究所2013:515-512）。



1. 南山裡（東亜考古学会 1933）
2. 大潘家村貝墓（劉 1995）
3. 李家溝貝墓（于 1965）
4. 營城子（于 1958, 東亜考古学会 1934, 大連市文物考古研究所・他 2019）
5. 沙崗子（許・呉 1991, 韓・他 2010）
6. 前牧城驛（旅順博 1986, 張・他 2010）
7. 姜屯（遼寧省文物考古研究所 2013）
8. 花兒山貝墓（新金県文化館 1981）
9. 馬山貝墓
10. 天瑞水泥廠（遼寧省文物考古研究所 2016・2017）
11. 蓋州沙崗子（魏・他 2010）
12. 蓋州光榮村（遼寧省文物考古研究所・他 2018）
13. 羊草庄（遼寧省文物考古研究所 2015）
14. 青年大街（王 2003）
15. 東門里（遼寧省博物館・他 1985）
16. 棒台子（王 1960）
17. 鵝房（遼陽市文物管理所 1980）
18. 苗圃（吉林大学辺境考古中心・他 2015）
19. 唐戸屯（沈 1955）
20. 南梅雪里（王 1960）
21. 三道壕（沈 1955, 遼陽市文物管理所 1980, 遼陽博物館 1990）
22. 陳相屯（周 1993）
23. 熱鬧路天主教修女院（瀋陽市文物考古研究所 2007, 2009）
24. 瀋州路（瀋陽市文物考古研究所 2004）
25. 小東（劉 2010）
26. 伯官屯（瀋陽市文物工作隊 1964）
27. 上伯官（徐 1991, 瀋陽文研 2007）
28. 八家子（瀋陽文研 2004）
29. 劉爾屯（肖・他 1991）
30. 中央路（鄭 1991）
31. 小甲邦（撫順市博物館 1992）
32. 国和街貝墓（呉・他 1992）
33. 錦州貝墓群（劉 1990）
34. 袁台子（遼寧省文物考古研究所・他 2010）

図1 遼東の主要漢墓と関連遺跡

漢早期は章帝期（41～88年）までとされる。それ以降は後漢中・晩期として記述されることが多い。暦年代で考古遺物を明瞭に区分できるわけではないが、各論者との共通の理解を得るため、本稿ではひとまず、この時期区分にて叙述していきたい。

## 1. 時期区分と研究略史

遼東郡の墓の分類や編年に関しては、発掘報告の際に個別に行われることが多く、全体的な

検討は多くない。ただし、遼陽地区の石室墓については、東潮（1993, 1997）が副葬品と石室の型式から編年を試みている。また、これを受けて石川岳彦（2009）も副葬土器の組成が共通する瀋陽地区もあわせて遼東郡の検討を行った。土器組成の変遷が、磚室墓や石室墓の型式にどのように対応するのかを示すことで、詳細かつ整合性の高い編年案を提示している。石川の論考を参照すると、前漢晩期から後漢初期までは土器組成に大きな変化はなく、区分が難しいことがわかる。なお、瀋陽・遼陽地区には前漢早期、中期の墓の事例は少ないが、1954・1955年に発掘された遼陽鵝房漢墓で好例が提示されている（遼寧省文物考古研究院・他 2019）。鵝房19号墓が前漢早期、同13号墓が前漢中期で、両方とも土壙木棺墓である。石川の論考と合わせると、瀋陽・遼陽地区では前漢晩期までは土壙木棺墓、王莽期前後に磚室墓、石室墓が出現し、以後は形態を複雑化させていくことがわかる。

一方、遼東半島南部では普蘭店花兒山漢墓、大連宮城子漢墓群などの著名な貝墓があるものの、各墓の詳細が報告されていないため、劉俊勇（2003）によって変遷案などが提示されていても不明瞭な点が残っていた。しかし、貝墓と磚室墓からなる大規模墓地である、普蘭店姜屯漢墓群が発掘され、豊富な副葬品を基に前漢早期から後漢中・晩期までの6期区分が提示された（遼寧省文物考古研究所編 2013）。これにより遼東半島南部の墓制変遷の大部分が明らかになったといえる。姜屯漢墓の報告によると、遼東半島南部の磚室墓は王莽期から出現したのち、後漢中期頃から磚室墓の墓室が増加し、複雑な構造になるという。ただし、遼東半島南部でも前漢晩期から王莽・後漢初期への変遷は漸移的であり、区分が難しい。筆者も姜屯漢墓の編年を受けて、白色土器の変遷について述べたことがあるが（中村 2017）、姜屯41号墓など、いくつかの墓地は前漢代に遡らせるべき資料が含まれるため、報告で提示された編年に関しても若干の修正が必要である。

前漢晩期と王莽・後漢初期の区分は、冒頭で述べた烏桓の出現と在地の動向を考える際に重要であることから、区分できることが望ましい。この時期に関しては、徐政ら（2016）が白色土器の変遷を山東半島の資料と対比させて考察しており、時期区分の指標となりうる。次章では、これらの論を参照しつつ、代表的な墓を取り上げ、遼東半島の墓制変遷を中心に再整理を行う。

## 2. 各地の墓と変遷

### (1) 遼東半島南部

#### a) 普蘭店姜屯漢墓

200基近い漢墓が発掘されており、前述した通り遼東半島南部の漢墓変遷の基準となる墓地である。報告では、前漢晩期までは堅穴土壙による貝墓が主体であり、王莽期から堅穴貝墓に墓道が付く型式が現れるとされる（遼寧省文物考古研究所編 2013）。しかし、大連宮城子貝墓など、これまでの発掘で墓道の付く前漢代の墓が知られている。この相違の原因は、姜屯41号墓の時間的位置付けにあり、土器の型式と組成の変遷にも関係してくる。そこで副葬品がまと

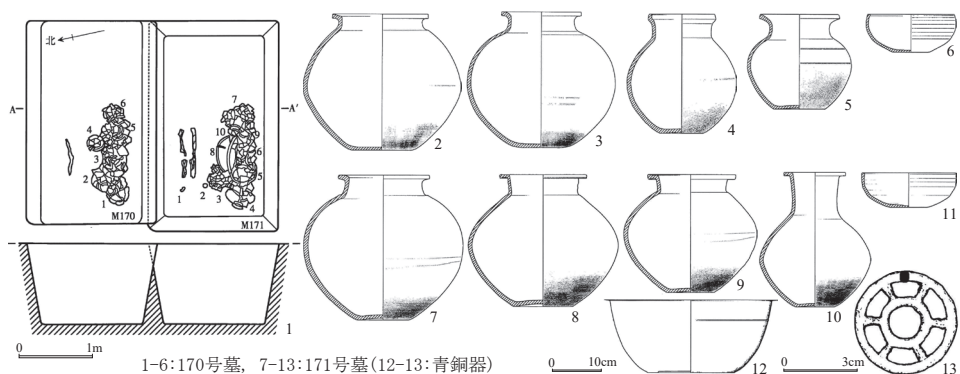


図2 普蘭店姜屯 170・171 号墓（前漢晩期，遼寧省文物考古研究所編 2013）

まって出土している墓を個別に取り上げ、前漢晩期～後漢初期の様相を土器と青銅器から確認してみたい。なお、多くの土器に横条縄線がみられるが（図 2-7、3-5 など）、これらは遼東系土器と呼ばれることもある。

まず最初に、170・171 号墓をみてみよう（図 2-1）。170 号墓は前漢晩期の堅穴貝墓であり、171 号墓の北辺を切って並列して構築されている。副葬土器は、鉢類を除くと、170 号墓が受部の短い受口壺（図 2-4）と広口罐（図 2-2～3）、171 号墓が広口罐（図 2-7）と口縁部が水平に外反する折沿罐（図 2-8～9）、折沿長頸壺（図 2-10）で構成される。これらは全て前漢中期から継承してきた器種である。また、後者には青銅製の車輪形飾も副葬されていた（図 2-13）。後述するが、これは騎馬遊牧民と関係が深い青銅器である。両方の土器を改めてみると、170 号が 171 号を切っているとはいえ、その様相はほぼ変わらない。これは、前漢晩期の半ばまでは夫婦が個別に墓壙をもち、先に死亡したほうの隣に配偶者が墓を並べるという方法に起因する。多くの場合、数十年といった時間差は生じない。また、墓地によってはより新しい段階まで採用される。

61 号墓は墓壙南側が一段高い木槨貝墓である（図 3-1）。副葬土器には、口縁端部が短く外反した広口矮領罐（矮領罐 A、図 3-2）と折沿罐（図 3-3～6）がみられる。胴下半部がすぼんだ矮領罐（矮領罐 C）の口縁部は外反している（図 3-7）。170 号や 171 号の土器組成に加えて、新たに各種の矮領罐が現れたという様相であり、170 号墓よりはやや新しいといえる。有蓋奩も現れ、受部の無い無節有蓋奩（図 3-17）、受部のある有節有蓋奩がみられる（図 3-21・22）。後述するが、有節有蓋奩は瀋陽・遼陽地区との関係が深い。

さて、問題の 41 号墓は、墓道をもつ木槨貝墓であり（図 4-1）、姜屯漢墓で副葬品が最も豊かな墓の一つである。副葬土器には、無頸で口縁断面が S 字状を呈する二点の白色甕（図 4-8・9）、広口罐（図 4-17）、口縁端部が三角形に肥厚した広口矮領罐（矮領罐 B、図 4-14）、高領罐（図 4-19）、直口の矮領罐 C（図 4-18）、節頸壺（図 4-10～11）、無蓋奩（図 4-21・22）などがある。以前は報告に従って、王莽・後漢初期と考えたが（中村 2017）、高領罐は王莽期以降は体部が太くなり、全体的に丸みのある形態になる傾向にあるため、41 号墓のものはそれより古い。節頸壺は彩絵のあるものが、旅順李家溝貝墓から出土しており（于 1965）、こちらは姜屯 41 号

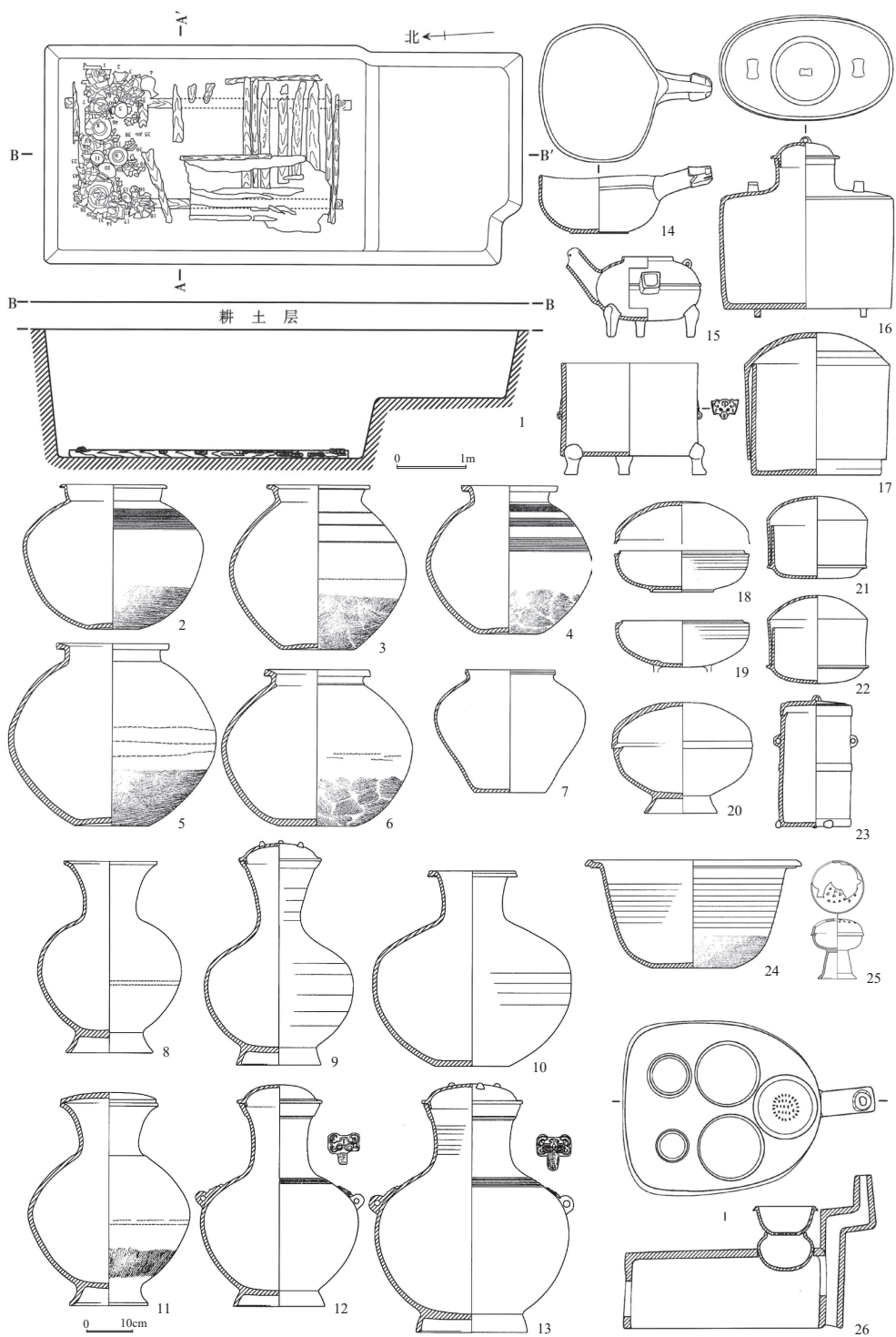


图3 普蘭店姜屯61号墓(王莽期, 遼寧省文物考古研究所編2013)

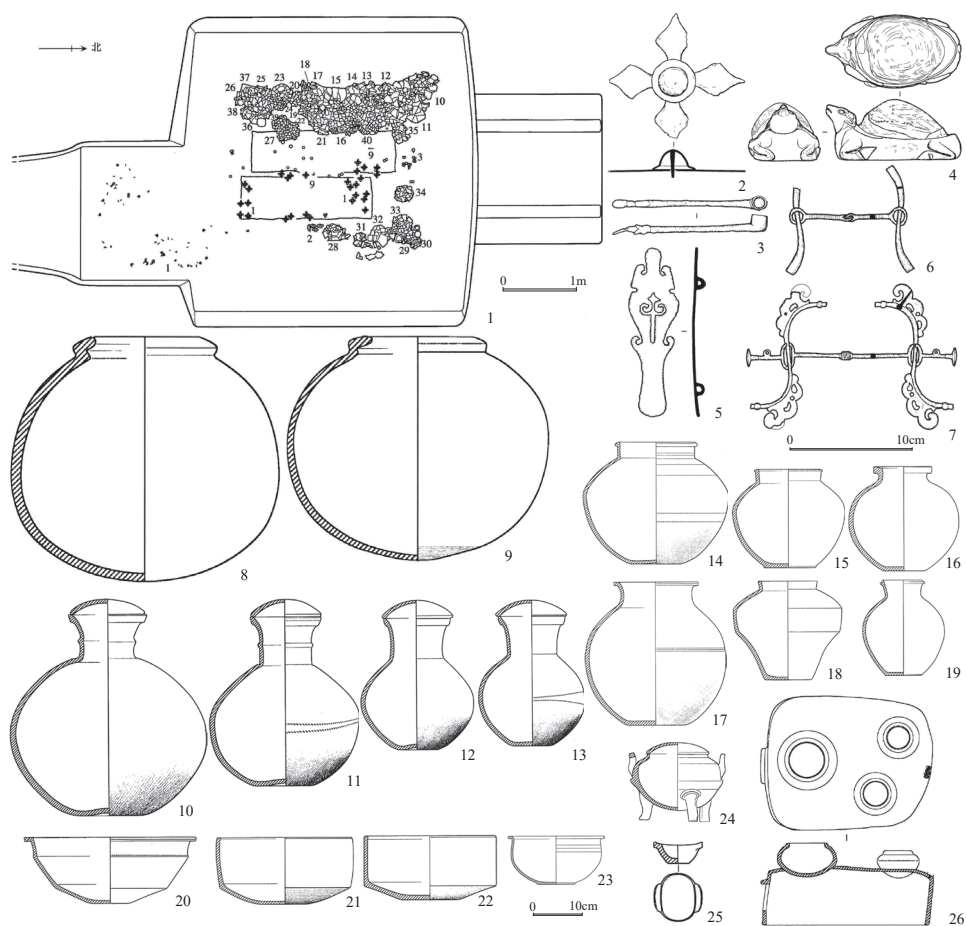
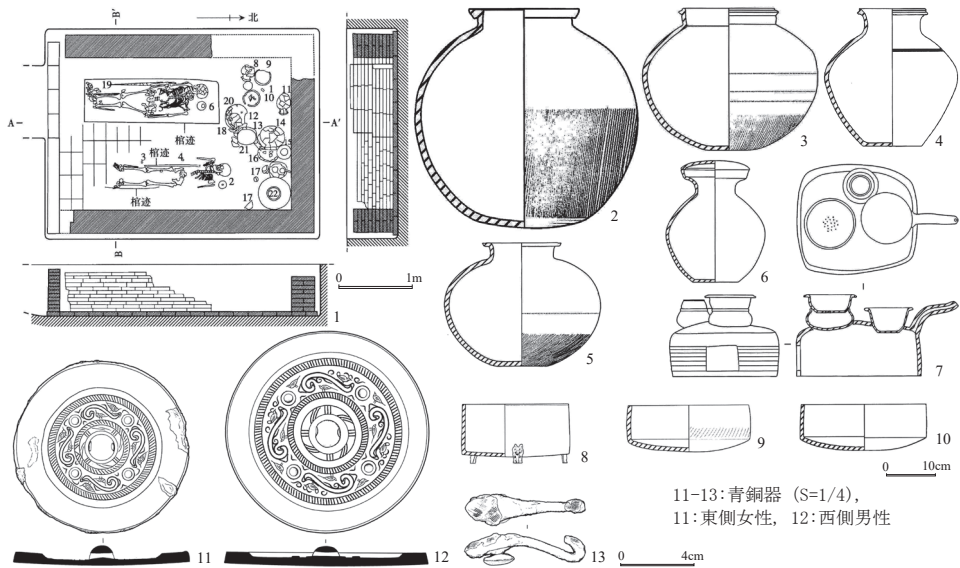


図4 普蘭店姜屯41号墓（前漢晚期，遼寧省文物考古研究所編2013）

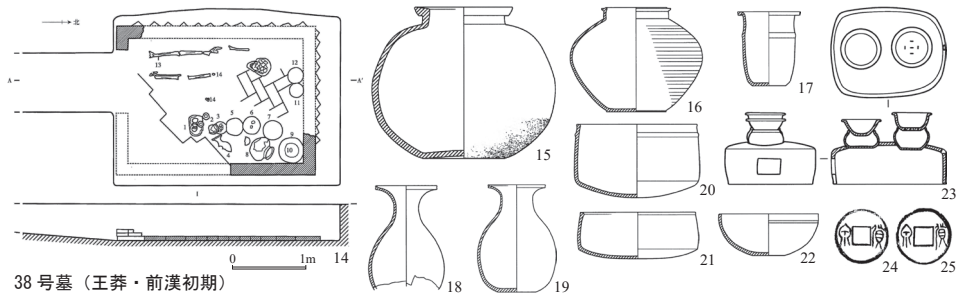
のものと同時期かやや古い様相をもっている。

ところで、徐政らはこの墓の白色甕を前漢晚期に位置付けている（徐・張2016）。そこで、朝鮮半島で出土した資料であるが、改めて前1世紀代の仁川雲北洞5地点1号土坑（漢江考古学研究院2012）の白色甕と比べてみると、姜屯41号墓のものは型式的にはほぼ同一であることに気付く。従って、他の土器の様相も勘案して、姜屯41号墓は前漢晚期に位置付けるべきである。ここには銅貝鹿鎮（図4-4）や明器となった鏹と銜（図4-6・7）が出土しており、いずれも前漢晚期を中心にみられる型式である。矮領罐Bと高領罐は王莽・後漢初期にも副葬されるため、組成的には大きな変化がつかみにくいものの、170号と同系統の広口罐が41号にも含まれる点を考慮すると、前漢晚期にいくつかの土器の型式が漸移的に移り変っていく状況であったと理解される。

19号墓は墓道をもつ単室の埴室墓で（図5-1）、男女が合葬されており、両者に虺龍文鏡が副葬されている。岡村秀典（1984）の漢鏡編年に従うと、西側の男性には虺龍文鏡IIA式（図5-12）が、東側の女性には虺龍文鏡IIB式（図5-11）が伴っていた。銅鏡の型式から年代的には前



19号墓（前漢晚期～王莽期）



38号墓（王莽・前漢初期）

図5 普蘭店姜屯の磚室墓（遼寧省文物考古研究所 2013）

漢晩期末から王莽期にかけて築造され、男性のあとに女性が追葬されたといえる。副葬土器は両者にまたがって配置されているので、これらの時期も同様の幅があると推定されるが、女性の頭部側にある白色折沿甕（図5-2）は王莽・後漢初期にみられる型式である。高領罐は前漢晩期に遡りうるが（図5-4）、受口壺はどちらの時期にもみられる。

38号墓は貨泉（図5-24・25）を伴う磚室墓（図5-14）で王莽・後漢初期である。白色折沿甕（図5-15）は19号墓と同型式である。矮領罐B（図5-16）は41号墓のものより肩が丸くなっている。無蓋盒は体部が内傾しており（図5-20・21）、直口であった41号墓から型式変化している。ただし、漸移的な変化である。

ところで、姜屯漢墓の年代を類推する際、山東の青島土山屯墓群4号封土墓が参考になる（青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019）。4号封土墓には木槨の全体を磚で囲った二つの主体部があり、片方の147号墓は墓道が付き、148号墓は堅穴墓墳であった。そして、148号の封土を覆って147号の封土を造成している。148号墓には虺龍文鏡Ⅰ式とⅡA式の間中間的な様相もつ鏡が、147号墓には獸帯鏡Ⅰ式と元寿二年（前1年）の紀年を含む木槨が伴っていた。

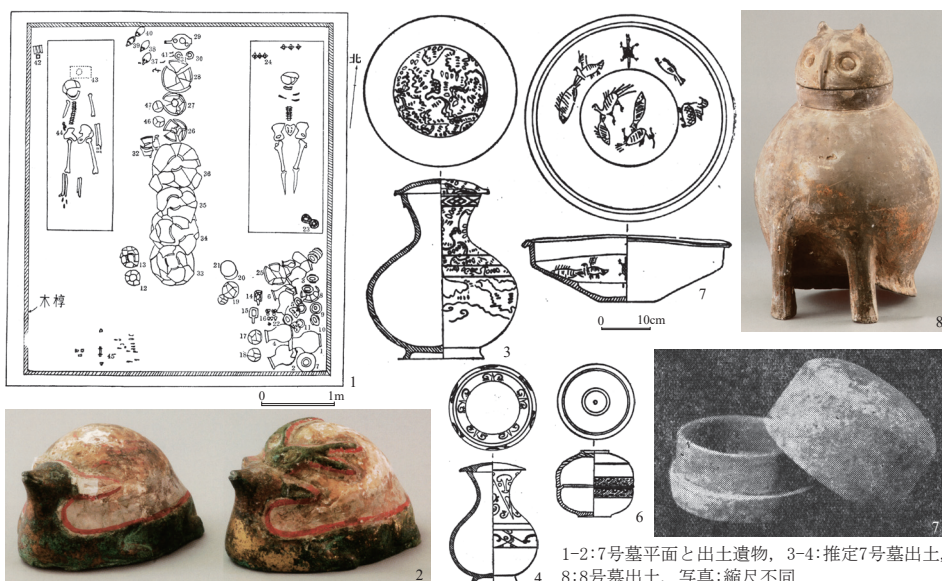


図6 普蘭店花兒山貝墓（旅順博物館・他1982，郭・張編2010）

従って、築造の順番も鏡の形式もより早い148号墓は前漢晩期に収まる。両墓からは、姜屯41号墓や55号墓と同一の銅刷（図4-3）も出土していることを考慮すると、姜屯漢墓の61号墓、41号墓、55号墓、19号墓は前漢晩期から前漢末にかけて連続的に造墓されたといえよう。

#### b) 普蘭店花兒山漢墓

姜屯漢墓の近隣にある古くから著名な墓地である。10基の貝墓が確認されているが、簡報のみで詳細はわからない。8号からは著名な鴟鴞壺（図6-8）と「射囊之印」とある亀鈕銅印が出土しているものの、詳細な墓室の形態は不明である。7号は木槨貝墓（図6-1）で多数の副葬品が伴っていた。銅貝鹿鎮（図6-2）と四葉座金具をみると、姜屯41号墓と近い時期であることがわかる。彩絵の有蓋壺（図6-3・4）、盒（図6-6）、有蓋奩（図6-7）も7号墓に伴っていたとみられる。有蓋奩は受部と底部が一体となった平底で他に例がない。

#### c) 大連營城子漢墓

營城子一帯からは貝墓や塋室墓が多数確認されている。1954年に発掘されたものについては（于臨祥1965）、鏡の年代から前漢晩期を主体とするようである。1号墓は型式の異なる異体字銘帯鏡が2面出土しており、石が混じった夫婦合葬の貝墓である。また、30号墓からは節頸壺が出土しており、姜屯41号墓に近い年代と推定される。

2003年にも多数の墓が発掘されたが、その中の76号墓は、木槨貝墓に墓道につながる塋積みの墓門を設置した独特なもので（図7-1）、白色甕や金帯金具が副葬されていた。白色甕は口縁部が屈曲せず、肥厚するだけになっており（図7-2）、王莽・後漢初期の型式にあたる。また、金帯金具（図7-16）は樂浪郡の平壤石巖里9号墓に類するもので、やはりこの時期に属する。

#### d) 大連前牧城驛漢墓

營城子に接する墓域で塋室墓と貝墓が広がっている。2006年に発掘された4基の墓は1号と



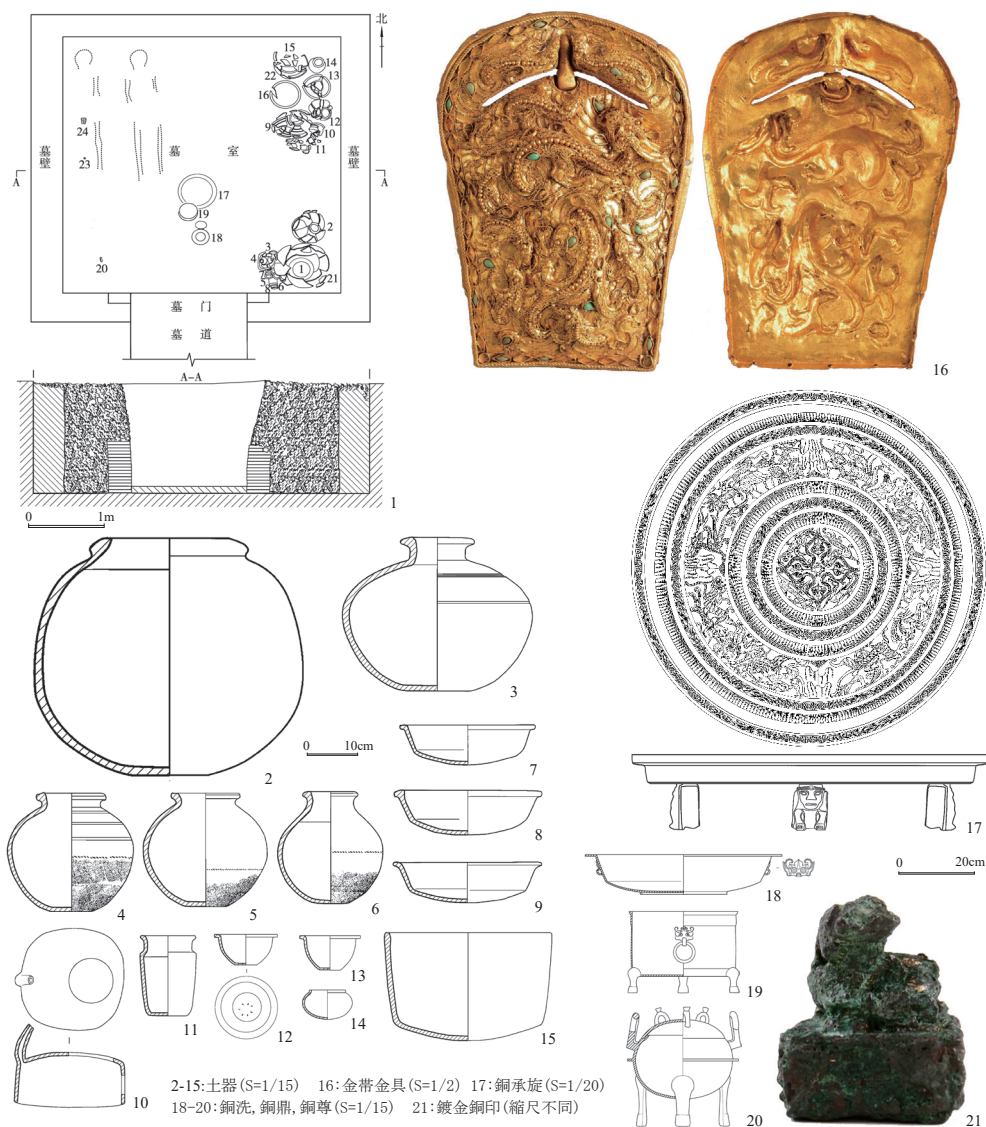


図7 大連營城子2003-76号墓 (大連市文物考古研究所・他2019)

3号が墓道付貝墓、2号が埴墓門貝墓、4号が埴室墓である。1号からは体部が丸い節頸壺や高領罐が出土し、型式変化はしているものの、姜屯41号墓に近い土器がみられる。この墓からは大泉五十のみが32枚出土しており、王莽期であることがわかる。2号墓からは營城子76号墓と同型式の白色甕が出土しており、埋葬施設の形態も含め同一の時期である王莽・後漢初期である。

## (2) 遼東半島北部

### a) 蓋州光栄村漢墓

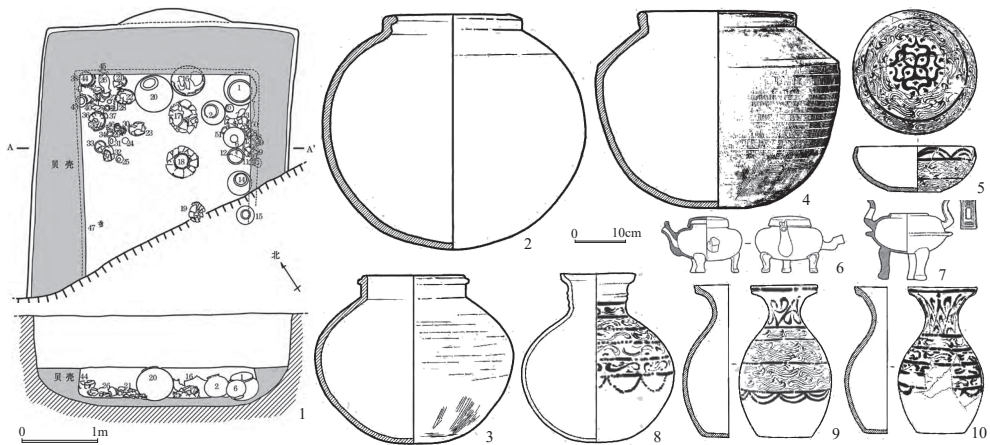


図8 蓋州光荣貝墓3号墓（前漢晩期，遼寧省文物考古研究所・他 2018）

蓋州市光荣村では8基の貝墓が確認されており、3号墓と7号墓ではS字口縁の白色甕が出土している（図8-2）。時期としては前漢晩期と考えられるが、口縁部の形態的に晩期末と推定されよう。彩絵土器も含まれており、体部が丸く、口縁部が若干受口になる長頸壺や細身の広口壺がみられる。形態的に類似するものは姜屯38号墓でもみられ（図5-18）、彩絵の無い同型式のものは天瑞水泥廠14号墓でもみられる。これらの墓は王莽期であり、同型式の土器が時期を跨いで存続していることが理解される。また、この種の壺はバランスの異なるものが瀋陽・遼陽地区でみられる。

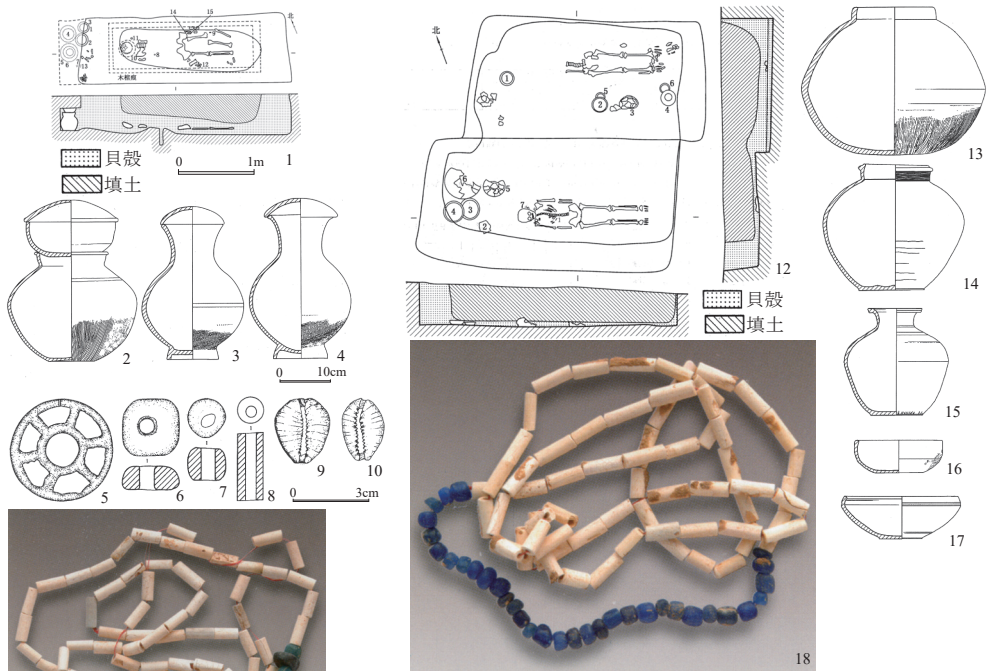
#### b) 営口天瑞水泥廠漢墓

営口市天瑞水泥廠では20基以上の貝墓が調査された。10号墓は頭位方向に龕のある単葬の貝墓で（図9-1）、淡青色ガラス小玉、白色滑石管玉、タカラガイからなる首飾（図9-7～11）と青銅車輪形飾（図9-5）が副葬されていた。副葬土器は矮領罐A（図9-2）と有蓋壺（図9-3・4）である。後者の型式は姜屯61号墓と同じかより古いいため、前漢晩期にあたる。車輪形飾は前述した姜屯171号墓で出土しており、これも前漢晩期である。また、朝陽袁台子18号墓では、天瑞水泥廠10号墓と同様に白色滑石管玉とともに出土している。鞍山羊草庄16号墓でも同様の状態で出土しており、前漢晩期～後漢初期に広まっていたことがわかる。

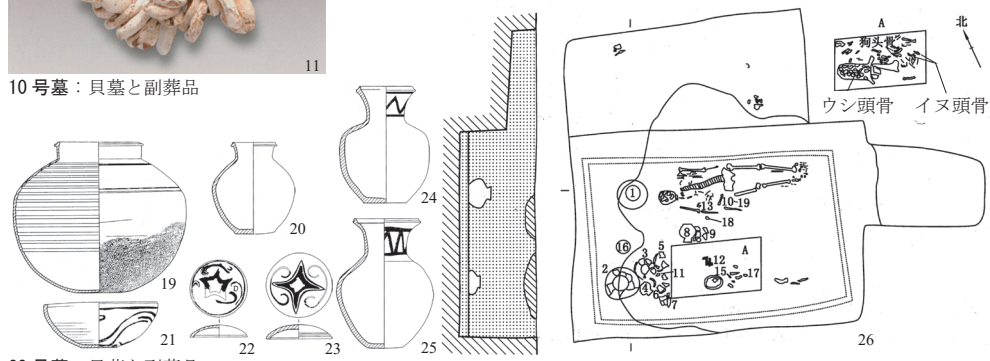
4号墓は二基の貝墓が南北に並列して構築されている。4号南墓の被葬者には紺色のガラス小玉と白色滑石管玉からなる首飾（図9-18）が伴っていた。4号南墓の高領罐（図9-15）は姜屯漢墓19号漢墓と類似しており、王莽期とみられる。

14号南墓は白色折沿甕（図9-27）が副葬されていることから王莽・後漢初期である。有節有蓋奩は受け部の内面がやや抉れている（図9-47）。受口壺（図9-34～36）については、蓋州市光荣村の事例でも述べたように、類似したものが前漢晩期末から後漢初期に散見される。23号墓の壺（図9-24・25）は彩絵をもつが、14号南墓のものよりは古い様相をもつ。

4号南墓と10号墓でみられたガラス小玉は、詳細は理化学的分析で判断する必要があるもの

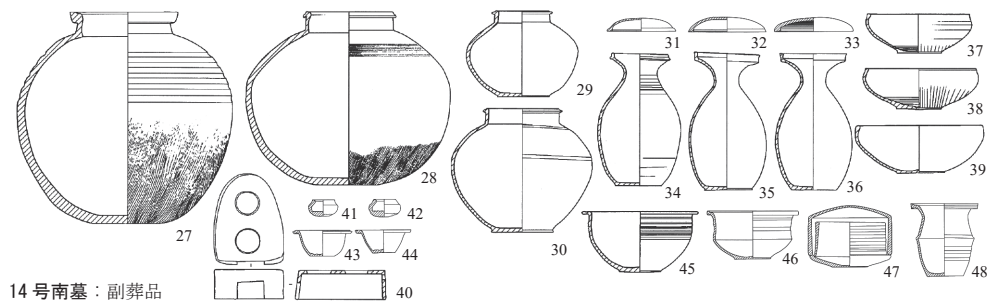


4号墓：貝墓と副葬品（4号南のみ）



10号墓：貝墓と副葬品

23号墓：貝墓と副葬品



14号南墓：副葬品

図9 営口天瑞水泥廠漢墓（遼寧省文物考古研究所 2017）

の、色調と形態からみてインドパシフィックビーズ (IPB) が多く含まれている。これらはインドから華南の嶺南地方で生産されたものであり (Oga and Tamura 2013, 田村 2015)、それに草原地帯で愛好されていた滑石製管玉が組み合わされている。さらに車輪形飾もあわせると、烏桓とされる墓でみられるセットと同様であるといえる。また、天瑞水泥廠漢墓ではいくつかの墓からウシとイヌの頭骨が確認されている<sup>2</sup> (図 9-26)。前者は近隣では鮮卑で良くみられる動物供儀である。しかし、天瑞水泥廠漢墓は貝墓であることから小凌河下流域から遼東半島の在地層の墓であり、騎馬遊牧民の墓ではない。むしろ、交流により影響を受けたと考えるべきであり、遼東半島における北方との接点を示す事例として注目されよう。

### (3) 遼陽地区の南端

遼陽地区では石室墓が流行するほか、細長頸瓶や体部の膨らみの弱い独特の長頸壺が土器組成に含まれる。貝墓はなく、遼東半島南部に分布していたものと同じ系統の白色土器もたらされない。この地域の南端にあたる鞍山市の羊草庄漢墓では、70 基を超える墓が発掘され (図 10)、遼東半島南部との差異と共通性が明瞭になりはじめた。

羊草庄漢墓には矮領罐 B と高領罐が多く副葬される (図 11)。また、盒 (図 11-8・9) と有節有蓋奩 (図 11-10) の副葬も目立つ。型式変化が分かりにくいものが多く、報告で提示されているような前漢晩期と王莽・後漢初期の区別はかなり難しい。しかし、少ないながらも姜屯漢墓に参考となる事例がみられるため、いくつかは区分可能である。

有節有蓋奩は姜屯 61 号の事例を基にすると、受け部内面に挟れがたいものが前漢晩期のものに該当する。羊草庄漢墓では 31 号墓、47 号墓の資料などである (図 11-10)。井は口縁が外反しない型式がともなっている (図 11-14)。細身で受口になった広口壺 (図 11-7) は、営口天瑞水泥廠 14 号南墓の事例 (図 9-36) にも一見する類似するが、羊草庄のものは受部が若干開き、胴部最大径が高い。体部の受口でない細身の壺 (図 11-5・6) にも共通するので、この地域の特徴といえよう。また、40 号墓は大泉五十と貨泉が伴うため、王莽・後漢初期に属する。副葬土器については、47 号墓と同系統ではあるものの、薰 (図 11-29) が 47 号墓のもの (図 11-18) より簡略化されている。また、珍しく矮領罐 C が伴うが、姜屯 41 号墓の事例 (図 4-18) からは型式変化しており、やはり後続する段階とみて良いだろう。

羊草庄漢墓は墓域中央部の 47 号墓や 75 号墓を中核として、主として南に広がっていったようであるが、ある段階において石槨墓 (図 12-1) が墓地西南部を中心に展開しはじめる (図 10)。16 号墓では土器は共通するものの、滑石管玉とガラス小玉の首飾、車輪形飾を含む青銅製装身具など同じ墓地の漢墓とは異なる外装の人物が葬られていた (図 12-1~16)。他の石槨墓でも過不足はあるものの、基本的に類似した装備をもつ (図 12-17~20)。また、興味深いことに、貨幣が伴う場合、全て貨泉か大泉五十である (図 12-6・7)。つまり、王莽・後漢初頭に集中的に現れたといえよう。彼らは遼西の朝陽袁台子の事例から (図 13)、烏丸と考えられている (徐・

<sup>2</sup> 23 号墓の頭骨に関しては、遺構の様相をみる限り、23 号墓に切られたそれ以前の墓に伴う動物供儀であったと考えられる。時期としては前漢晩期末かそれ以前である。

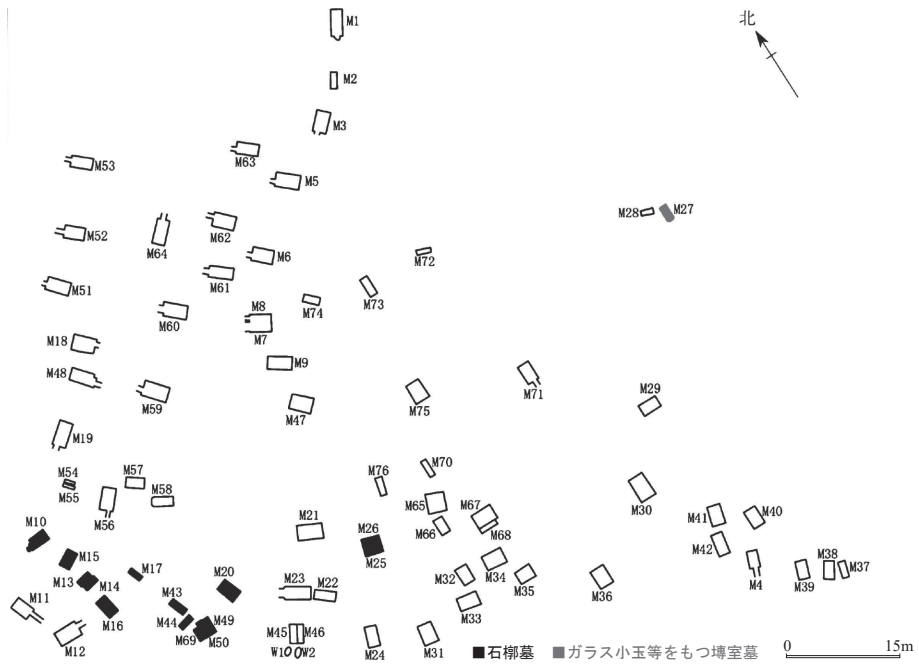


図10 鞍山羊草庄の墓域と石槨墓の分布 (徐・白2015を改変)

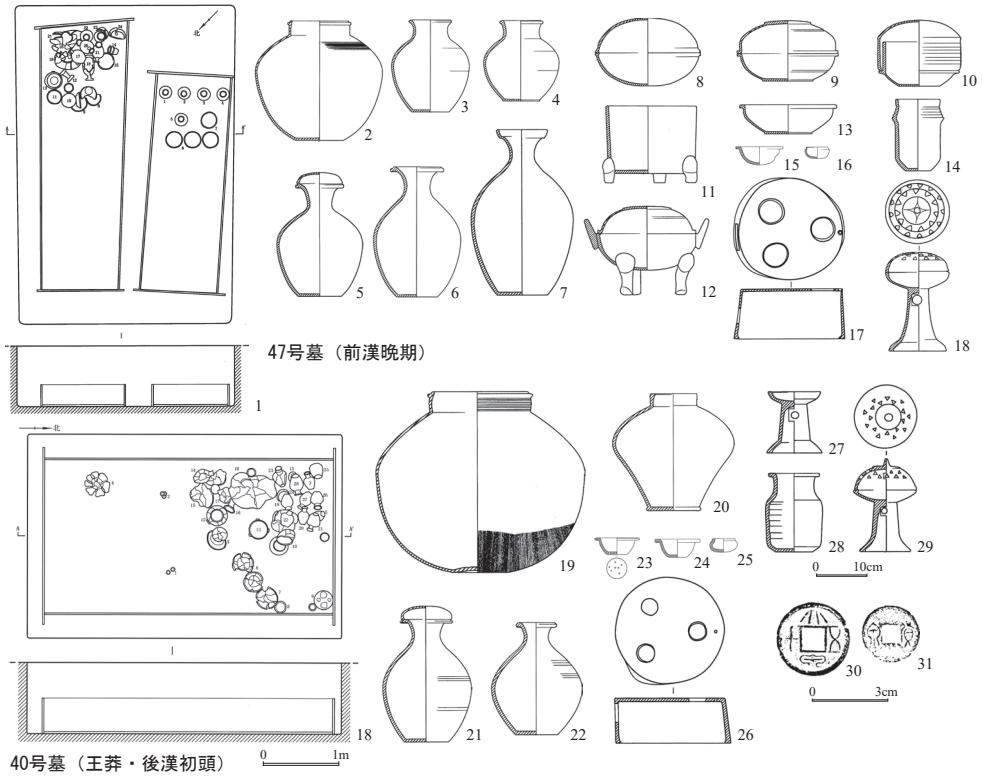
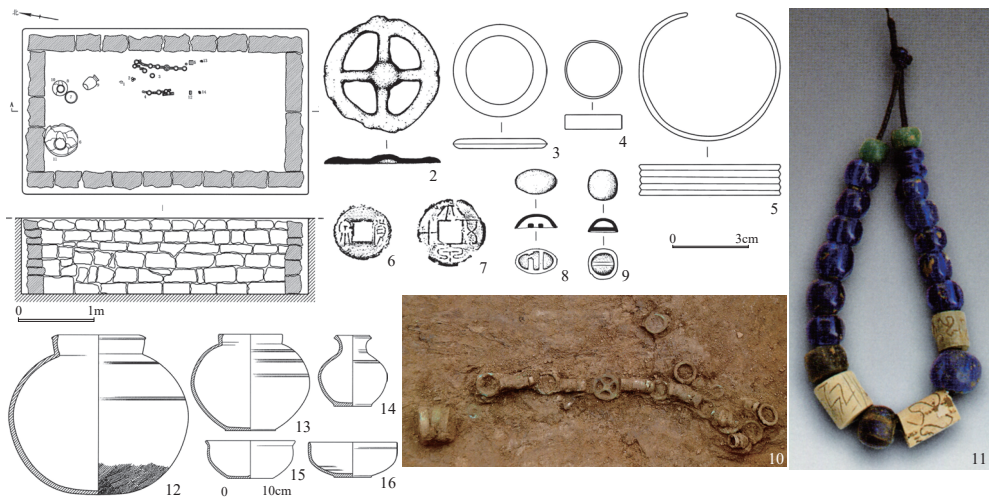


図11 鞍山羊草庄の木槨墓 (王莽期, 遼寧省文物考古研究所2015)



16号墓（王莽・後漢初頭）



15号墓

26号墓

69号墓

25号墓

図12 鞍山羊草庄の石槨墓と出土装身具（遼寧省文物考古研究所2015）

白 2015)。滑石製管玉と青銅器からみて騎馬遊牧民とは考えられるものの、完全に烏丸であるかは確証はない。とはいえ、文献では遼東群にも住ませたという記述があることから可能性は高く、本稿でも一先ず彼らを烏桓として扱っておきたい。

### 3. 貝墓と交易

これまでみてきた事例をもとに交流関係について検討してみたい。まず、前漢晩期には夫婦が隣り合って埋葬されるようになることから、中原の影響を受けていることは間違いない。墓道や埧室墓についても同様である。

交易品としては遼東半島南部では白色土器が多数もたらされ、山東半島との交流が綿密であったことが窺われる。王莽・後漢初期までは瀋陽・遼陽地区の中核には白色土器は届いておらず、遼東半島と内陸部の交易活動には大きな差異があったことが窺われる。しかし、金州湾より南の南端部を除く遼東半島南部と、瀋陽・遼陽地区では、底部形態が異なる場合が多いものの、矮領罐Bや高領罐が共通して副葬される。矮領罐Bは羊草庄漢墓で多く、遼西の朝陽袁台子X10号墓でも前漢晩期のもものが副葬されているため、前漢晩期に交流網が広がったことを示しているのだろう。今回は検討できなかったが、墓の種類は異なっても、後漢中期以降は突起のある方形や楕円形の有蓋奩などが、遼東郡全体で共通するようになり、より共通性が強くなる。

一方、山東半島が結節点となっていると思われるが、より南方からガラス小玉が多量に入ってきていることも注目される。姜屯漢墓や花兒山貝墓でみられる銅貝鹿鎮も南方に由来するものとされ、南海九郡の設置により交易の活発化と関連すると考えられている(程2017:60; 劉・侯2019:60)。もちろん、それ以前に南方のものが入ることは十分にあるが、前漢中期以降に増加することは、楽浪郡や朝鮮半島南部の事例(中村2015)をみても明らかであり、南海九郡と楽浪郡の設置が遼東郡南部の遼東半島の動向にも大きく影響したとみられる。特に、貝墓を墓制にする人々は、その副葬品の豊かさから交易活動の中核にいたことが窺われる。現時点では南方からもたらされたとみられるガラス小玉の数量は、烏桓の石槨墓に多いものの、時期的には貝墓に早く入ってきている。彼らを貝墓民と呼ぶことが可能であるならば、貝墓民はガラス交易の仲介者であったと推定されよう。朝陽袁台子18号墓では滑石管玉、車輪形飾とともに、ガラス小玉が副葬されていた(図13)。18号墓は石槨墓ではないが、装身具は遊牧民のものである。遼東半島からは遠いが、すぐ南は錦州で貝墓圏内である(図1)。遼東半島南部の姜屯171号でみられたような前漢晩期の車輪形飾はこうした騎馬遊牧民と貝墓民のネットワークを通じてもたらされたといえる。なお、王莽・後漢初頭の金帯金具をもっていた宮城子76号墓の被葬者は富商であったと推察されており(大連市文物考古研究所・他2019:

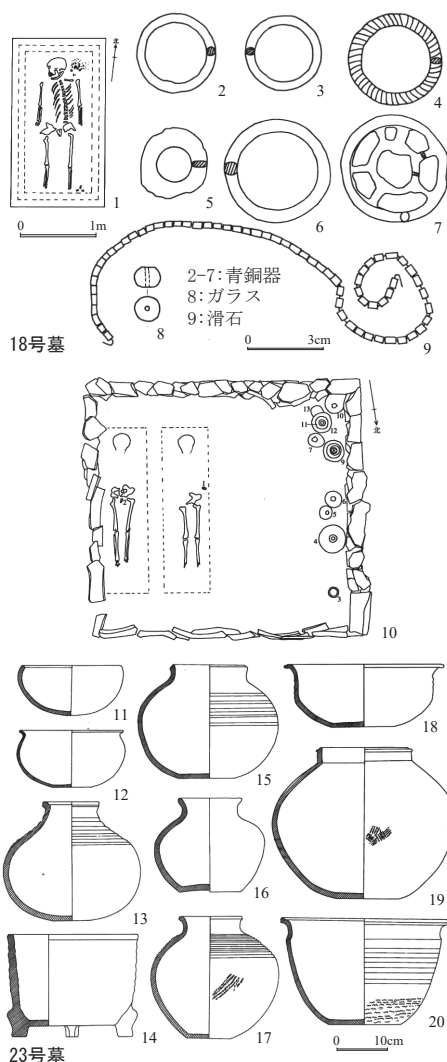


図13 朝陽袁台子の烏桓関連墓  
(遼寧省文物考古研究所・他2010)

図13) 朝陽袁台子の烏桓関連墓(遼寧省文物考古研究所・他2010)は、滑石管玉、車輪形飾とともに、ガラス小玉が副葬されていた(図13)。18号墓は石槨墓ではないが、装身具は遊牧民のものである。遼東半島からは遠いが、すぐ南は錦州で貝墓圏内である(図1)。遼東半島南部の姜屯171号でみられたような前漢晩期の車輪形飾はこうした騎馬遊牧民と貝墓民のネットワークを通じてもたらされたといえる。なお、王莽・後漢初頭の金帯金具をもっていた宮城子76号墓の被葬者は富商であったと推察されており(大連市文物考古研究所・他2019:

61-62)、南北の流通に関わる貝墓民を表象した存在と評することができよう。

ところで烏桓であるが、『後漢書』では、武帝の代に上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡の塞外に住ませたという。そして、その帰順に関しては『魏書』のなかに、建武二十五年(49年)に郝且らが九千余人を率いて朝貢し、西は朔方郡から東は遼東属国に至る地域の塞内に住ませたとある。徐政らはこの出来事を羊草庄漢墓に烏桓墓が出現する契機と考えている(徐・白 2015:407)。しかし、時期比定は王莽・後漢初期にしており、時間的に矛盾している。『後漢書』呉漢伝には、建武三年(27年)に「烏桓突騎三千餘人」が用いられたとあり、49年以前に一定規模の烏桓人集団が帰順しているので(吉本 2010:72)、副葬貨幣から王莽・後漢初期と考えるならば、こちらのほうが矛盾は少ない。

## おわりに

本稿では遼東半島の前漢晩期から後漢初期の土器変遷を再整理し、交易品の動きについても検討を行った。その結果、貝墓習俗をもつ人々が周辺の烏桓などの騎馬遊牧民にインドパシフィックビーズ(IPB)を代表とする南からの文物を提供していたことが推察された。魏堅(2004)の研究を参照すると、時期はやや下るが、鮮卑墓にもガラス小玉が比較的多く副葬されている。草原地帯からか南海からかの区別は理化学的分析が必要であるが、これらのガラスには南海から遼東及び遼西を経由してもたらされたものが含まれていた可能性を考慮しておきたい。

一方、前漢晩期から後漢初頭の楽浪郡でもガラス小玉が多く副葬されている。さらに平壤貞柏洞37号ではIPBだけでなくゴールドサンドウィッチグラスも出土している(高久 1995、中村 2015)。これは地中海東部から中央アジアで製作されたものであり、東アジアでは前1世紀の段階では草原地帯にしか分布しない。匈奴墓にはナトロンガラス、植物灰ガラスの両方のゴールドサンドウィッチグラスを含む重層ガラスがみられ(田村・他 2019)、鮮卑にもその流通網が継承されている。つまり、地中海東部からシルクロードや草原の道を介して、匈奴がゴールドサンドウィッチグラスを入手し、直接或いは帰属していた鮮卑や烏桓から、貝墓民を介して、楽浪郡の貴族層に渡ったと推察することができよう。現時点では楽浪郡のガラス小玉は前1世紀半ばから副葬され始めるようであり<sup>3</sup>、遼東郡と大差ない。ガラス小玉が遼東半島を経由したか、楽浪郡から直接山東半島に向かう流通経路を併用されたかは重要な問題であるが、これについては今後の課題としておく。

最後に南方との関係を示すもう一つの鍵である貝類について予察を述べたい。銅貝鹿鎮に使われたホシダカラ、貝墓や烏桓墓で出土するタカラガイに関しては、前述したように南海九郡の設置が契機であったことに異論はない。ただ、同時期のタカラガイは朝鮮半島南端の靺島貝塚(慶南考古学研究所 2006)からも出土し、副葬品としても利用されている。靺島貝塚では大

<sup>3</sup> 旧稿(中村 2015)では『朝鮮遺跡遺物図鑑』2の記載通り、雲城里9号墓のガラス小玉を楽浪郡設置時である前2世紀末~1世紀前葉の資料と紹介したが、高久建二(1995)の研究も参考に区分しなおしたところ、前1世紀後半が妥当であることがわかった。今回、この点を訂正しておきたい。



量の弥生土器に、楽浪土器、遼東系土器がみられ（鄭 2008）、南北の結節点になっていた可能性が想起される。さらに、沓岐のカラカミ遺跡で「周」の字が刻まれた遼東系土器がみられる（古澤 2019）ことから、前漢晩期～後漢初期においては遼東半島から北部九州は交易網で繋がれていたことは間違いない。沖縄で出土する明刀銭や滑石混入土器の存在を考慮すると、この交易網は琉球まで及んだことが想起され、戦国時代後期にはその原型は形成されていたのだろう（鄭 2008、中村 2015、2017）。

北部九州ではゴホウラとイモガイが主体で、タカラガイは重要視されていないが、日本海側では但馬地域の志高遺跡で多数のタカラガイが入った壺が出土し（高野・田代 2011）、琉球でもホシダカラなど多様な貝類が副葬品として利用されている（新里 2011）。タカラガイが選別されて遼東郡まで続く交易ネットワークの商品となっていた可能性があるならば、日本列島が当時の交易に参加し、前 1 世紀以降、多くの漢の文物を入手しえた理由となりうるだろう。

本稿を作成するにあたり、向井佑介氏には文献の入手等でご助力いただいた。また、田村朋美氏にはガラス小玉に関する多くのご助言をいただいた。石川岳彦氏の 2019 年の東北アジア考古学研究会での発表が大きな刺激となった。皆様のご協力で記して感謝いたします。なお、本研究は JSPS 科研費 JP18H00736 の助成を受けたものである。

## 引用文献

- 東潮 1993 「遼東と高句麗壁画: 墓主図像の系譜」『朝鮮学報』149: 1-46.
- 東潮 1997 『高句麗考古学研究』古川弘文館.
- 石川岳彦 2009 「考古遺跡・遺物からみた遼東郡」『国立歴史民俗博物館研究報告』151: 83-97.
- 于臨祥 1958 「宮城子貝墓」『考古学報』1958-4: 71-89.
- 于臨祥 1965 「旅順李家溝西漢貝墓」『考古』1965-3: 155-156.
- 王来柱 2003 「遼陽青年大街発見的兩座漢墓」『遼寧考古文集』51-57, 遼寧民族出版社.
- 王增新 1960 「遼寧遼陽南雪梅村壁画墓及石墓」『考古』1960-1: 16-19.
- 王增新 1960 「遼陽市棒台子二号壁画墓」『考古』1960-1: 20-23.
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5: 661-702.
- 韓建宏・張志成・張翠敏・王宇 2010 「沙崗子漢墓発掘報告」『大連土羊高速公路発掘報告集』64-96, 科学出版社.
- 漢江文化財研究院 2012 『仁川雲北洞遺跡』
- 魏堅編 1998 『内蒙古中南部漢代墓葬』中国百科全書出版社.
- 魏耕耘・王輝・崔艷茹 2010 「蓋州沙溝子漢墓発掘簡報告」『遼寧考古文集(二)』165-172, 遼寧民族出版社.
- 吉林大学边境考古研究中心・遼寧省文物考古研究所 2015 「遼寧遼陽苗圃漢魏石室墓 2008 発掘報告」『考古学報』2015-4: 505-536.
- 許明綱・吳青雲 1991 「遼寧大連沙崗子発現二座東漢墓」『考古』1991-2: 185-187
- 慶南考古学研究所 2006 『勒島貝塚』

- 吳鵬・辛癸・魯宝林 1992 「錦州国和台貝墓発掘簡報」『遼海文物学刊』1992-1: 44-47・155.
- 周陽生 1993 「瀋陽陳相屯魏晉石槨墓清理」『遼海文物学刊』1993 -1: 19-21.
- 徐政・白宝玉 2015 「鞍山羊草庄墓地乙類墓葬属性再探討」『羊草庄漢墓』393-407, 文物出版社.
- 徐政・張美子 2016 「遼寧地区兩漢時期白陶器初步研究」『北方文物』2016-3: 37-43.
- 肖景全・郭張安 1991 「遼寧撫順市劉爾屯村發現兩座漢墓」『考古』1991-2: 182-184.
- 新金県文化館 「遼寧新金県馬山漢代貝墓」『文物資料叢刊』4: 86-88.
- 瀋陽市文物工作隊 1964 「瀋陽伯官屯漢墓發掘報告」『考古』1964-11: 553-557.
- 瀋陽市文物考古研究所 2004 「遼寧瀋陽瀋州路東漢墓發掘簡報」『北方文物』2004-3: 1-8.
- 瀋陽市文物考古研究所 2004 「遼寧瀋陽八家子漢魏墓葬群發掘簡報」『北方文物』2004-3: 9-16.
- 瀋陽市文物考古研究所 2007 「瀋陽熱鬧路天主教修女院古代墓群 2006 年考古發掘報告」『瀋陽考古文集』第 1 集: 38-61, 科学出版社.
- 瀋陽市文物考古研究所 2007 「瀋陽東陵上伯官新發現的普墓」『瀋陽考古文集』第 1 集: 62-66, 科学出版社.
- 瀋陽市文物考古研究所 2009 「瀋陽熱鬧路天主教修女院古代墓群 2007 年考古發掘報告」『瀋陽考古文集』第 2 集: 92-120, 科学出版社.
- 青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019 「山東青島土山屯墓群四号封土与墓葬的發掘」『考古學報』2019-3: 405-438.
- 佘俊岩 1991 「瀋陽上伯官漢墓清理報告」『遼海文物学刊』1991-2: 51-54.
- 大連市文物考古研究所・大連營城子漢代墓地考古工作隊 2019 「遼寧大連市營城子漢墓群 2003M76 的發掘」『考古』2019-10: 52-62..
- 高久健二 1995 『楽浪古墳文化研究』学研文化社
- 高野陽子・田代弘 2011 「弥生中期の交易拠点における遠隔地地域間交流の一例」『京都府埋蔵文化財情報』116: 5-14.
- 田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』95: 19-32.
- 田村朋美・中村大介・Odokhuu Angaragsuren・Bayarsaikhan Jamsranjav・Jean-Luc Houle 2019 「モンゴル匈奴墓出土ガラス玉類の考古科学的研究」『東アジア文化遺産保存学会第 6 回大会要旨集』1-6.
- 張翠敏・王宇・劉金友 2010 「前牧城驛漢墓發掘報告」『大連土羊高速公路發掘報告集』40-63, 科学出版社.
- 沈欣 1955 「遼陽唐戸屯一帶的漢墓」『考古通訊』1955-4: 35-39.
- 程曉偉 2007 「漢代嵌貝鹿形席鎮」『文物春秋』2017-1: 56-60.
- 鄭仁盛 2008 「瓦質土器楽浪影響説の検討」『嶺南考古学』47: 5-44.
- 鄭辰 1991 「撫順市中央路東漢墓發掘簡報」『遼海文物学刊』1991-2: 55-56.
- 東亜考古学会 1933 『南山裡：南滿洲老鉄山麓の漢代墓』東京.
- 東亜考古学会 1934 『營城子：前牧城驛附近の漢代壁画墓』東京.
- 東北博物館 1955 「遼陽三道壕兩座壁画墓的清理工作簡報」『文物參考資料』1955-12: 49-58.
- 中村大介 2015 「楽浪郡以南における鉄とガラスの流通と技術移転」『物質文化』95: 33-48.
- 中村大介 2017 「環東シナ海及び黄海における長距離交易土器」『竈導入前後の土器生産体制の進展と政体の成長に関する日韓の比較考古学』2013~2015 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 25-36.

- 新里貴之 2011 「南西諸島における先史時代の墓制 (III): 沖縄諸島」『地域政策科学研究』8: 101-127.
- 白雲翔 1998 「漢代積貝墓研究」『劉敦愿先生紀念文集』55-77, 文物出版社
- 撫順市博物館 1983 「遼寧撫順縣劉爾屯西漢墓」『考古』1983-11: 989-991.
- 撫順市博物館 1992 「撫順小甲邦東漢墓」『遼海文物學刊』1992-1: 48-53.
- 古澤義久 2019 「カラカミ遺跡出土「周」字先刻遼東系土器の検討」『市史跡カラカミ遺跡6次・市史跡カラカミ遺跡7次・国特別史跡原の辻遺跡』171-177, 長崎県壱岐市教育委員会.
- 吉本道雅 2010 「烏桓史研究序説」『京都大學文學部研究紀要』49: 55-122.
- 劉煥民 2010 「瀋陽小東漢墓群勘探調查与発掘」『遼寧考古文集(二)』173-192, 遼寧民族出版社.
- 劉謙 1990 「遼寧錦州漢代貝殼墓」『考古』1990-8: 703-711.
- 劉俊勇 1995 「遼寧大連大潘家村西漢墓」『考古』1995-7: 661-665.
- 劉俊勇 2003 『大連考古研究』哈爾濱出版.
- 劉超・侯茹 2019 「徐州漢墓出土的嵌貝銅鹿鎮及相關問題」『文物天地』2019-5: 56-60.
- 遼寧省文物考古研究院・遼寧省博物館・遼陽博物館 2019 「遼陽鵝房漢代墓地 1954 年, 1955 年発掘簡報」『中国国家博物館館刊』2019-9: 36-52.
- 遼寧省文物考古研究所編 2013 『姜屯漢墓』文物出版社.
- 遼寧省文物考古研究所編 2015 『羊草庄漢墓』文物出版社.
- 遼寧省文物考古研究所 2016 「遼寧營口鮫魚圈區天瑞水泥廠漢代磚室墓発掘簡報」『北方文物』2016-2: 17-21  
・28.
- 遼寧省文物考古研究所 2017 「遼寧營口鮫魚圈漢代貝殼墓」『考古學報』2017-1: 119-148.
- 遼寧省博物館・遼陽博物館 1985 「遼陽旧城東門里東漢壁画墓発掘報告」『文物』1985-6: 25-42.
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 2010 『朝陽袁台子』文物出版社.
- 遼寧省文物考古研究所・营口市文化局文物科・盖州市文物管理处 2018 「遼寧蓋州市光榮村積貝墓的調查与発掘」『北方文物』2018-3: 17-26.
- 遼陽博物館 1990 「遼陽市三道壕西晉墓清理簡報」『考古』1990-4: 333-336.
- 遼陽市文物管理所 1980 「遼陽発現三座壁画墓」『考古』1980-1: 56-58.
- 旅順博物館 1986 「遼寧大連前牧城驛東漢墓」『考古』1986-5: 397-403.
- 旅順博物館・新金県文化館 1981 「遼寧新金県花兒山漢代貝墓第一次発掘」『文物資料叢刊』4: 75-85.
- Oga K. and Tamura T. 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3rd century BCE – 7th century CE), *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9: 35-65.

埼玉大学紀要（教養学部）第 55 卷第 2 号の訂正

中村大介「漢代における遼東郡と交易」

(誤) p.133 図 3 普蘭店姜屯 61 号墓(王莽期, 遼寧省文物考古研究所編 2013)

(正) p.133 図 3 普蘭店姜屯 61 号墓(前漢晩期, 遼寧省文物考古研究所編 2013)